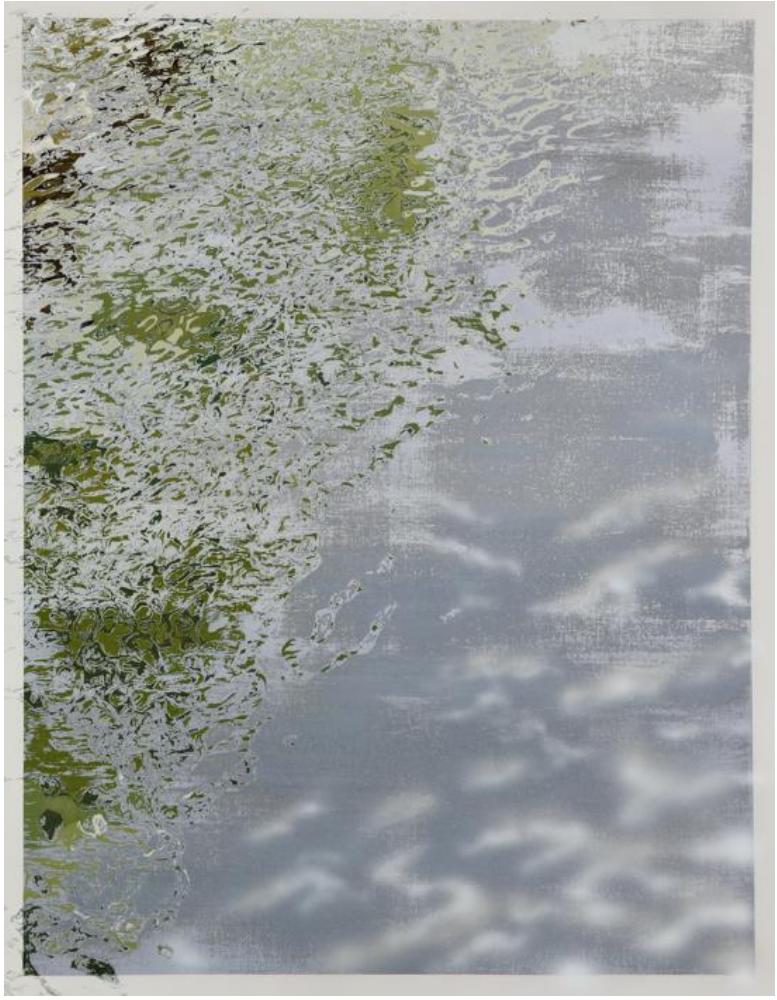


「ten8478808587」

50F（116.7×91.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

元になったのは天王洲の橋から見える川の水面。
天王洲は大学院修了後に初めて賞をいただいた展覧会が行われた場所であったのだが、
なかなか機会なく少し前に 10 年ぶりに訪れた。
現在はアートが展開される町として変化していっているが、当時はまだそこまでという感じだった記憶がある。
当時の自分は不安がないわけではないが根拠のない自信や希望を持って過ごしていたし、若さもあったなと思う。
今の自分が見る景色は当然物理的にも変化しているが気持ち的にも変化して少し愁いを帯びてる気がする。

「e5572947830」

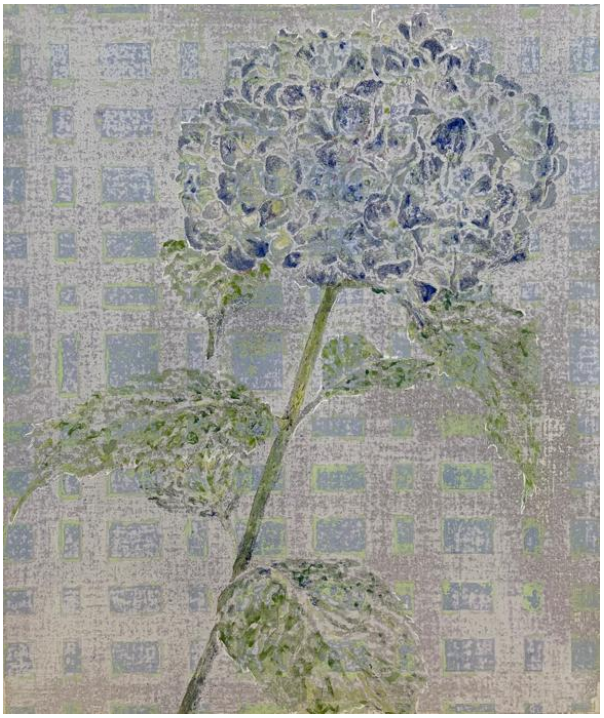
50F（116.7×91.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

元になったのは江ノ島へと続く端から見える海の水面。
江ノ電に乗って高校に通っていた自分にとって江ノ島は特別な場所、かと思う。
実際に江ノ電から江ノ島は意外とよくは見えない。建物の間に見えたり、少し離れた位置から見る(といっても見えるんだからそれなりに近いわけだが)ものという印象。
島に渡ることはそれに比べればかなり回数は減るだろう。そこから見る景色は意外と変わっていないように感じる。もちろんお店も周りの建物もきれいになったり、海外の人が増えたりと少しは変わっているかもしれないが、汚い海の水もトンビも昔と変わらない。
ここに来るとなんとなくリセットできる気持ちになる。
積み重ねたものが払いのけられる。

「誰かのためについた嘘」

8P（45.5×33.3 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

百合のにおいが苦手だ。
多分苦手なのはにおいではなくて描けなくて、そのものを嫌いになる理由をこじつけていたのだろう。
タイトルは MONKEY MAJIK の「Lily」の歌詞から。
浪人時代にこの曲の入っているアルバムをよく聞いていた。彼らの活動拠点は仙台でこの当時はなんでこんな流行ってるのに拠点東京じゃないのかなとか思ったりはしていたが、その後自分が東北に行くとは思ってなかった。彼らが離れない理由も少しわかった気がする。

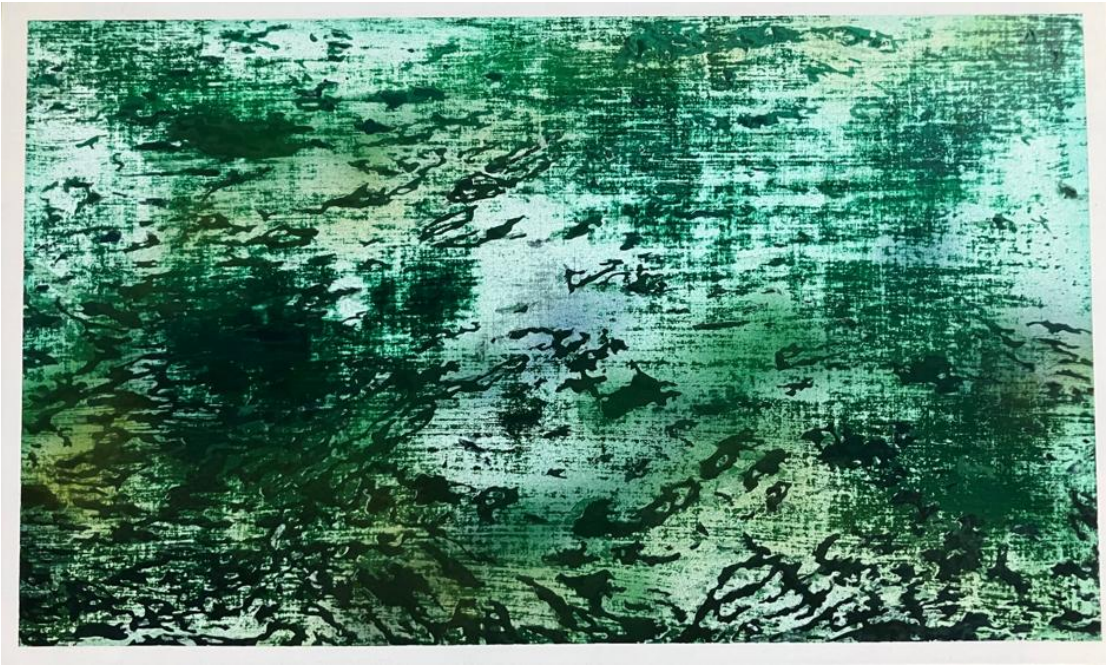


「泣きながら笑ったのは」

8F（45.5×38.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

現在、アトリエにしている父の実家の敷地に咲いているアジサイを描いた。
記憶ではアジサイ自体はおそらく昔からあるのだが、育てているのは店舗を貸している床屋さんだと思う。
そのアトリエにしている元借家も祖父母や父が住んでいた母屋も区画整理で来年には更地になる予定である。
現実的な話をすればアトリエなくなるのやばいなというところなのではあるが、色々思い出のある場所が全くなくなってしまうというのはなかなかに想像しずらい。
自分としては今までにはない経験かもしれない。
去年叔母が亡くなって、今はもう一人の叔母が一人で住んでいる母屋を先日少し片付けた。
子どもの頃に見てきた状態とは多少の改装や大幅な模様替えがあるので完全に同じ景色ではないのだが、ものがなくなったりするとその当時の光景が思い出されて、記憶が蘇ったりする。
更地になればそんな状況すらなくなる。ましてや区画整理だ。風景も変わるだろう。
多分このタイミングだから描くべきかなと思った絵。

タイトルは Something ELse の「夕立ち」から。
あじさいというとこの曲か山崎まさよしの「あじさい」が思い浮かぶ。
ともに浪人時代によく聞いていた。



「ガラス越しに背中で見てる渚」

8M（27.3×45.5 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

タイトルはサザンオールスターズ(とカバーした研ナオコ)の「夏をあきらめて」の歌詞から。
なにかをつかもうとして、うまくいかなくて諦めてしまうことはままよくある。
惰性や妥協も自分を構成する一部で良くも悪くも自分を形作る輪郭となる。
一つの選択のせいで苦労することもあるし、これでよかったと思いこめるようなこともある。

「気の抜けたコーラでも」

6F（41.0×31.8 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具、カラーインク

タイトルは Suchmos の「MINT」の歌詞から。
描かれているものがミントなわけではなく、さわやかで柔らかな雰囲気と明るさを作りたかった。
タイトルに拝借したこの曲もミントが出てくるわけではなくフレッシュさや新鮮さを表したものらしく、近しいものを感じた。
Suchmos の曲はこの曲以外ほとんど聞かないが、車の CM でバズった少しあとに何かで流れてきた際にいい曲だなと思って、こればかり聞いてた時期があった。

「偶には怖がらず」

6F（41.0×31.8 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

タイトルは椎名林檎の「茜さす 帰路照らされど…」の歌詞から。
大学時代になぜか撮っていたある写真を元に作った作品。
なぜ撮ったのかも思えてないのだが、夕焼けの写真だった。
空とそれ以外が沈みゆく光のコントラストで分かれていたのが印象的で。
当時、美大生の９割が椎名林檎を好きだった(という認識)。自分も中学時代からずっと聞いていた。この曲はファーストアルバムに入っていたので回数で言えばかなり聞いているはず。でもなんかタイトルが覚えられなかった。Suchmos の曲はこの曲以外ほとんど聞かないが、車の CM でバズった少しあとに何かで流れてきた際にいい曲だなと思って、こればかり聞いてた時期があった。

「ensu7173049326」

6F（41.0×31.8 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

今年たまたま新江ノ島水族館に行った。何年かぶりにイルカのショーを見たのだが、やっぱりすごい。この絵はそのイルカのプールの水面を描いた。
子どもの頃のえのすいには結構ボロボロだけどそれなりにサイズがあって地下からイルカの様子が見えるイルカのプールがあった(イルカのプール以外もボロボロだったか)。
子どもの頃は大概男の子は乗り物が好きで、車に電車、飛行機なんかに興味を持つもの(だった、今はそうでもないのか、当時がそういう価値観だっただけなのか)なのに自分はそういったものに全く興味がなく、今もほぼない。代わりに動物や生き物は好きだった。動物園や水族館、博物館にはよく連れて行ってもらったと思う。今も水族館は好きだ。
江ノ島水族館も改装され、「新」へと変わったが、当時の気持ちと変わらない喜びや驚きはその水に反射しているように思えた。

「君の手は」

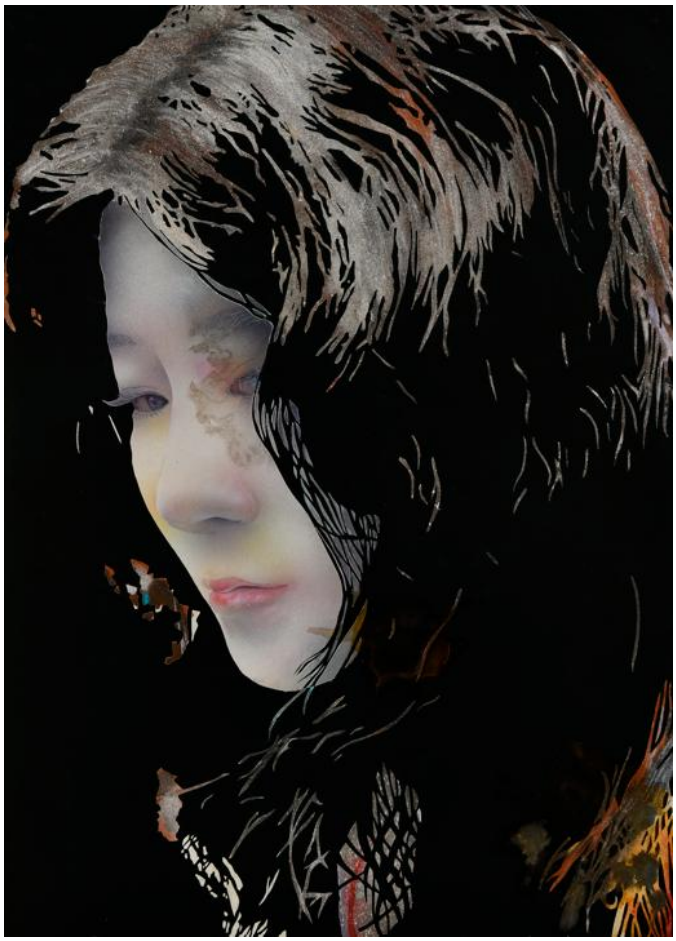
6P（41.0×27.3 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

モチーフになった花はルドベキア、祖父母宅の庭に生えていた。
この花は 7 月 31 日の誕生花らしい。父の誕生日である。
特にこの花に父を感じたわけではないのだが、繋がりを感じ、奥田民生の「息子」という曲の歌詞からタイトルを付けた。
父目線の私たちはこの曲のように見えてはないだろうが、それでも希望を託し、成長を見守ってくれているところはこの花が庭から祖父母を見守っている目線とほんの少し重なったのだ。Suchmos の曲はこの曲以外ほとんど聞かないが、車の CM でバズった少しあとに何かで流れてきた際にいい曲だなと思って、こればかり聞いてた時期があった。

「かっこよくない優しさ」

6M（41.0×24.2 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

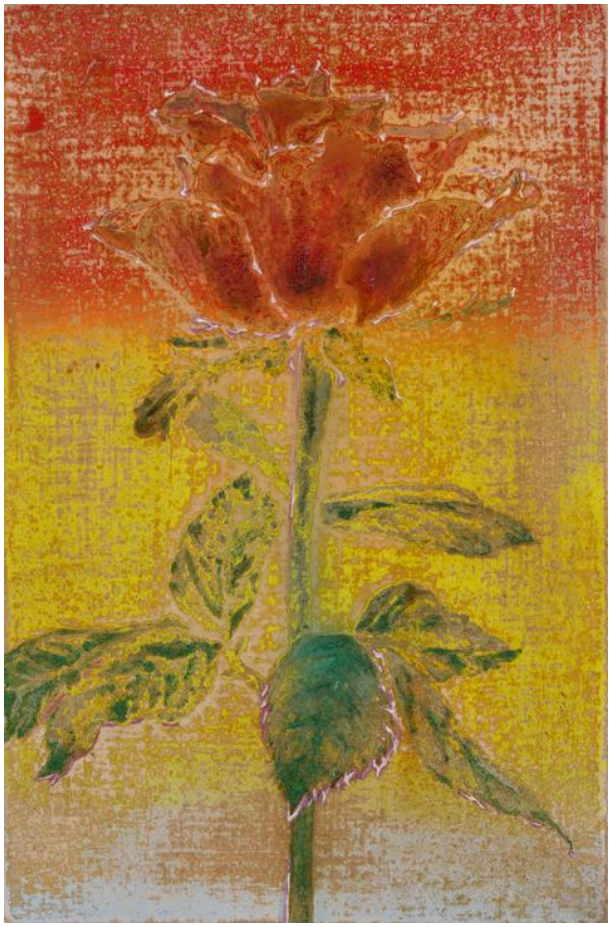
タイトルは YUI(「YUI for 雨音薫」名義)の「Good-bye days」の歌詞から。
この曲が主題歌だった映画『タイヨウのうた』はその後ドラマ化もした(そっちは全く見てなくてわからない)ので当時はそれなりに流行っていたんだろうなと思う。
ロケ地が湘南中心で当時通っていた予備校が鎌倉だった自分にとっては見慣れた風景が随時出てきて親近感がわく作品だった。
ひまわりを見ると映画の内容も相まって、なんとなくこの曲を思い浮かべる。父目線の私たちはこの曲のように見えてはないだろうが、それでも希望を託し、成長を見守ってくれているところはこの花が庭から祖父母を見守っている目線とほんの少し重なったのだ。Suchmos の曲はこの曲以外ほとんど聞かないが、車の CM でバズった少しあとに何かで流れてきた際にいい曲だなと思って、こればかり聞いてた時期があった。



「スクリーン」

4F（33.3×24.2 ㎝）
綿布、ピグメント、岩絵の具、アクリル絵具、箔

映画のワンシーンのような場面を描きたかった。
ただ特定のどんな映画のどの場面、というビジュアルではなく、「なんか見たことあるような…記憶にあるけど思い出せないな」といった形にしたかった。
映画が好きでかなり見ていたのは高校から浪人の間で大学に入ってからもそれなりに見ていた。履歴書に趣味の欄があれば映画鑑賞と書くくらいには好きだった。
ただ最近は忙しさも相まって見る気持ちも薄れて、あまり見られなくなってしまっている。
内容の記憶は薄れてしまって、どれがどの映画の場面だったかわからなくなってしまった気持ち、自分の全く関係ない記憶と混ざり合って出来てしまったシーンの一部、そんなものを表現した。ど聞かないが、車の CM でバズった少しあとに何かで流れてきた際にいい曲だなと思って、こればかり聞いてた時期があった。



「あの日飲み干したジンジャーエール」

4P（33.3×22.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

花ビラの配列には規則性があり、比率なども個体差はあるものの基本的な並びやバランスは種類によって決まっている。
従って受験生になるとモチーフを「見なくても描ける」というフェーズがある、のだが私は本当にそういった状況に無縁というかものの把握が出来ず、今思えば頭が悪かったなと思うのだが描けなかった。
バラの花は年中花屋にあるためモチーフとしても良く出ていたため、特にトラウマを生む要因になった。
のに、やはり今回描くとしたらまずはバラだよなと思ってしまうのも呪縛のようなものだなと。
タイトルはくるりの「ばらの花」から拝借した。過去の記憶とのリンクという意味で今回の個展のテーマにもはまるなぁという部分とこの曲を聴いてから好きになった「ジンジャエール」という言葉も使いたかったという理由から。

「秘密の言葉を尋ねて」

4P（33.3×22.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

こちらのヒガンバナもアトリエの敷地に生えてたもの。
時期が来ると結構生える。ネズミ除けなのかな。

タイトルは Nornis の「Lycoris」の歌詞から。
Nornis は Vtuber の戌亥とこ / 町田ちま の 2 名による女性ボーカルユニットで
ここ最近よく聞いている。

「季節はずれ」

4P（33.3×22.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

オミナエシ(女郎花)は秋の七草に入る野草。ただ秋とはいえ早いと初夏ごろから花を見ることもある。
むしろ暑い時期に見ることが多いような印象である。実際今回描いた花は夏の盛りに摘んだ。
タイトルの季節はずれはそのままの意味であるが、ゆずの「季節はずれ」という曲からも取っている。ゆずはおそらく小中高校生時代に一番聞いたアーティストだと思う。

「幾つもの星が流れていた」

SM（22.7×15.8 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

タイトルは THE YELLOW MONKEY の「バラ色の日々」の歌詞から。
バラをモチーフにしている点は「あの日飲み干したジンジャエール」と一緒なのだが、こちらは花の美しさをなかなか表現しきれない自分のもどかしい気持ちを込めて。

「白い闇の中で」

0F（18.0×14.0 ㎝）
綿布、ジェッソ、岩絵の具、アクリル絵具

モチーフはガーベラ。タイトルはスピッツの「ガーベラ」の歌詞から。
ガーベラの形状をパラボラアンテナに見立てて誰かのありのままを受け取ろうとしている、歌詞に感じる。
全く詳しくないが電波受信の原理としては情報を電磁波に変えてアンテナでその電波を受信する、的なことだと認識している。
当然ながら物理的なものを瞬間移動させているわけではないので送信側の何かをそのまま受信側が顕在させることは出来ない。受け取る側が一定のルールに合わせて電波を変換しているのだろう。
人が情報を受け取るとき、この一定のルールというものがなく独自のルールで変換しているから齟齬が生まれるのだろうなとなんとなく思った。特に絵描きの場合、その独自のルールの部分が個性であり、大事にされるわけだが必要な情報を必要な形で変換できないことは単なるバグで喜ばしいことではない、受験期は教わるし、それが正義なのでありのまま受け取ろうとするその姿勢はこの曲と重なった。